

町指定文化財

御霊神社本殿が修復されました

御霊神社は庄にあり、その歴史は平安時代に遡ります。社伝によると、寛治4（1090）年、堀河天皇が熊野参詣の途中にこの地域にあった吉備真備の旧跡を訪ね、その功績をたたえて5町四方の境内地を与え、八所御霊を崇めたことに始まるとされます。江戸時代には、御霊八所宮と呼ばれていました。

吉備真備とは、奈良時代に活躍した学者で、2度にわたって唐に留学し、算術や天文・兵法・暦など最先端の知識を学んで日本に持ち帰り、日本文化の礎を築いたとされる人物です。政界においても重用され、右大臣の地位にまで昇り詰めました。また、当時としては非常に長寿であったことや、その学識から神格化され、学問の神様としても信仰されています。八所御霊とは、奈良時代から平安時代の政争に敗れて非業の最期をとげた人々の霊で、吉備真備もその一人とされています。当時は、疫病や天災などの原因は、御霊のたたりと信じられ、その怨霊を鎮めるために祭る御霊信仰が盛んでした。

御霊神社の本殿は中規模の社殿であり、装飾などの細部にも手が込んだ上質な仕上がりです。現在は色あせていますが、元は赤・白・緑色などの塗料で着色されていました。現在の社殿は享保6（1721）年に建てられたものです。屋根はヒノキの樹皮を使って屋根をふ

く「檜皮葺き」という工法で、千数百年の歴史があると言われる伝統技術です。昨年9月の台風21号によって、本殿の屋根の一部がめくれ上がり、飛散した枝が当たって破損するなどの被害を受けました。昨年11月には、檜皮葺き専門の技術者による修復が行われました。

薄い檜皮を1枚ずつ1cm程度ずらしながら重ね上げ、竹釘で打ち付けます。この際、片手は檜皮がずれないように押さえないければならないため、竹釘の打ち付けは金槌を握っているもう片方の手でを行い、口に含んだ竹釘をつかんで突き刺し、素早く打ち付ける独特の技術が用いられます。文化財の保存継承は、地元の人々のあつい信仰や職人の伝統技術によって支えられています。



修復後



修復の様子

復が行われました。薄い檜皮を1枚ずつ1cm程度ずらしながら重ね上げ、竹釘で打ち付けます。この際、片手は檜皮がずれないように押さえないければならないため、竹釘の打ち付けは金槌を握っているもう片方の手でを行い、口に含んだ竹釘をつかんで突き刺し、素早く打ち付ける独特の技術が用いられます。文化財の保存継承は、地元の人々のあつい信仰や職人の伝統技術によって支えられています。